

出版の目的

一般社団法人 日本小児東洋医学会 前代表理事 崎山武志

小児の各種疾患に対して、適正な薬物療法を示し、治療効果を上げることが広く求められている。この現状に対して、日本小児科学会では各分科会でのガイドラインの作成を推進している。日本小児東洋医学会でも、数年前からガイドラインの作成の是非について検討を進めていたが、漢方治療のエビデンスがまだ十分ではない。そこで、処方の手引きを作成し、治療者の便宜に役立てようと意見が集約された。

小児科での漢方薬の使用は、最近までそれほど多くはなく、一部の小児科医に限定的であった感が否めない。ところで、西洋薬の有効性はわかっているにもかかわらず、その副作用などを不安視して、漢方治療の併用を望む一般成人、特に女性と高齢者の漢方外来の受診が増加の傾向にある。メディアの影響も大きいと思われるが、西洋医学一辺倒では対処し難い病気に対しては、小児科でも漢方治療を求める患児の増加とともに、小児科医も漢方薬を使用する機会が増えて来ている。この状況を踏まえて、一般社団法人日本小児東洋医学会でも漢方薬の適正使用に関する情報提供を行う必要性が議論され、手引き書として発刊することが了承された。

日本の漢方治療は一人の医師が西洋医学的な診断に加えて漢方薬を処方することができる。このような医療システムを持つ国は世界中で日本以外にない。この日本の伝統医療である漢方薬の処方、本来なら漢方的な診断のうえに処方するのが原則ではある。しかし、その診断法も流派の違いや煎じ薬の使用など、必ずしも一定の見解を求めるまでには至っていない。日本の漢方をリードする日本東洋医学会では、漢方入門書や学生のための、あるいは専門医のためのテキスト発刊はしているが、未だに漢方薬使用のガイドラインの出版は行っていない。このような状況で、本学会が漢方治療のガイドラインを作成するにはまだ機が熟していない。しかし、小児科で扱う病気に対する漢方治療の手引き書があれば、漢方を専門としない小児科医が手元に置いて使え、患者さんにとっても利益が大きいと判断する。小児科の日常臨床の現場では、漢方薬と言えば、医療用漢方エキス製剤が処方の主役となっている。

以上を踏まえて、今回、医療用エキス剤の使用に限定して、小児の漢方療法の手引き書として本書を発刊する。

本書の発刊は、旧本学会の理事・評議員の先生方の協力を得て、学会として刊行した。漢方を専門とする先生方や、煎じ薬を中心とされる先生方、現代中医学を基本に処方される先生方には、不満足な面もあろうかと思われる。この発刊後に、会員の先生方や専門医の先生方からのご意見を参考に、改訂版の発刊やガイドラインの作成なども今後の学会業務と考えたい。この手引き書は、一見解であって標準ではなく、医療水準の慣行を示したものではないが、小児科の先生方は勿論、小児を診療される多くの内科医・相談される薬剤師の先生方にも広く参考にいただければ、学会としては嬉しい限りである。